

## シュティフター『晩夏』(3)

鈴木善平

### Adalbert Stifters “Nachsommer”. (3)

SUZUKI Zenpei

Heinrich verläßt die Stadt und lebt auf dem Lande d.h. in der Natur. Er wird Naturforscher. Sein Verhalten bei der Naturforschung und seine Forschungsmethode führen uns zu der “Vorrede” von “Bunten Steinen”.

シュティフターの作品において、自然は重要な意味を持つとされている。『晩夏』においてもそうである。シュティフターの自然について考える一端として、『晩夏』の主要人物ハインリヒが、その幼年時代からやゝ長じて自然研究を始めた頃に至るまでの間、自然とどのように関わっているかを見て行きたい。

ハインリヒは、幼い時は都会に住んでいたが、やがて都会から田舎に移り住み、次第に更に深く自然の中へと行動範囲をひろげて行った。この間のハインリヒの自然との関わりは次の通りである。

1. 自然は、子供の発育のために良い場所として、両親からハインリヒに与えられた。ハインリヒはその自然の中にあつた。

2. ハインリヒは、18才位の頃から尚一そう深く自然の中へ入って行き、自然を研究の対象として観察するようになる。

3. 自然研究者としてのハインリヒは、シュティフターが『石さまさま』の「序文」によって作り上げた自然の中にいる。

#### I

子供の発育のために良い場所として、自然が与えられた。

ハインリヒは、両親と妹と一しょに都会に住んでいた。「私の父は商人だった。父は都会にあるかなり大きな建物の二階を一部借りて住んでいた。」<sup>1)</sup>そして「私たちがまだとても幼い頃には、母は夏をいつも私たちと一しょに田舎で過ごした。」<sup>2)</sup>そういう時、父親は仕事のために都会にとどまり、休日など

に田舎に来て家族と過ごしていた。

しかし一家はやがて田舎に引越すことになる。「郊外に庭つきの家が手に入ったからである。私たちは戸外の空気を味わい、体を動かし、一年中田舎で住めるようになったのである。郊外に家ができてとても嬉しかった。都会の古い陰気な家から郊外の住み心地のよい広い家に引越しが行われた。」<sup>3)</sup>

「田舎で」とか「戸外の空気を味わって」という言葉を、自然の中でと云いかえてもよいと思う。少なくとも都会におけるよりは自然に近いであろう。但しこの郊外の家は、都心から遠くはなくて、ハインリヒの父が、毎日朝出勤して正午に昼食に帰り、午後また出かけるという程度の所にある。

都会を離れて郊外の田舎へ行くということをするのは、ハインリヒの一家だけではない。移り住むとまではいかなくても、都会に住む人が田舎に住む人に招かれて田舎で過ごすというかたちで、よく行われることであった。「さて、家が広くなったので、都内からいままでもよりも頻りに子供づれの人たちが招かれることになった。そして私たちは中庭や庭で遊ぶことが許された。」<sup>4)</sup>

ハインリヒは、こうして自然の中に、もしくは都会におけるよりも自然に近いところに住んでいるのであるが、更に一そう自然の中へと入って行く。「私たちは、夏の天気の良い祝祭日には、野外に出かけて、村や山で一日を過ごすこともあった。」<sup>5)</sup>

ハインリヒは、都会に住んでいたとき都内の体育の施設に通っていた。妹は、女子のための施設がなかったため、家の部屋の中に設けた設備で体を鍛えていた。ハインリヒと妹は、郊外に住むようになり

庭で運動ができるようになったことを喜んだ。ハインリヒの父が郊外の田舎に引越したのは、子供たちの発育のため、体育の訓練のためであった。「私は体育の訓練を続けなければならなかった。私たちはごく幼い子供の頃からもうできるだけ多くの体の運動をしなければならなかった。夏田舎に住んだのも主にそのためだったし、父が郊外の家を買った主な動機となったのもその家に庭があることであった。」<sup>6)</sup>

両親は、子供たちの発育のための場所を、郊外の家の中に求めただけではなく、更に深く自然の中に——例えば山の中に——求めて子供たちに提供する。「そのほか、特に夏にはよく遠足に出かけた。町はずれの広々とした所に来ると、両親は、私が妹と一しょに特別に方々歩きまわってもよいと許してくれた。私たちはかなりの道のりを歩いたり、山に登ったりして体を鍛えた。それから両親が待っている場所に帰って来た。」<sup>7)</sup>

以上、ハインリヒが関わりをもった自然は、両親によって与えられた、子供の発育のために良い場所としての自然であった。ここで「与えられた」というわけは、前に見たように、両親がその場所を求めて田舎へ住んだのであり、また上の引用文で見られるように、体を鍛えるために「方々歩きまわってもよいと両親は許してくれた」という表現があるからである。

## II

研究の対象としての自然。

ハインリヒは自然の中へ深く入って行く。彼は自然を研究の対象として観察する。老リーザハと初めて会ったとき、彼は云っている。「私はおおよそのところ一種の自然研究者です。もう何年も自然の事物に取り組み、観察を事とし、特にこの辺の山について研究しております。」<sup>8)</sup>

さきに述べたように、ハインリヒと妹は、両親の配慮のもとに自然の中で体育の鍛錬に努めて来たが、彼らは勉強にも励んでいる。具体的に学科目の名は挙げていないが、「誰にでも必要とされている学科の初歩」から始めて「将来教養ある階層あるいはすぐれた階層の一員になるような子供たちのための学科」を学んだとある。<sup>9)</sup>「一般的な人間教養の基礎とみなされている学科の勉強を—そう系統的にすすめると共に、他方では興味を覚え始めた科目の勉強を拡げることにした。」<sup>10)</sup>「私は非常に勤勉だった。好

きなことをするときの青年に特有の燃えるような熱意のすべてをあげて、自分の選んだ対象に打ちこんだ。」<sup>11)</sup>

ハインリヒが18才になった頃、父は彼が「夏の間しばらく両親のもとを離れてどこか田舎の一個所で住むことを許してくれるようになった。」<sup>12)</sup>そこは町からあまり遠くない所にある父の友人の別荘であったが、「翌年の夏の二度目の滞在場所は、町から遠く離れた農家であった。」<sup>13)</sup>こうして彼は次第に深く自然の中へ入って行くことになる。

この二度目の滞在のとき、ハインリヒは、遠く離れた両親に報告の手紙を書くことを通して、自分の考えを詳細にまとめて書くことを覚え、また自分の周囲にある事物の観察に専心し始める。彼は「子供のときから、自然の創造物や人間の生活の規則的な歩みの中にあらわれる事物の現実に大いに親しんでいた。(略)物の名前や由来や用途をたずね、(略)田舎へ行くと私はすべての植物や石の名前を知ろうとした。」<sup>14)</sup>ハインリヒはこのような性質であったから、滞在する地方の農作物の生産を学び、工業にも目を向け、「そのあと自然史を勉強し始めた。植物学から始めた。」<sup>15)</sup>そしてあらゆる種類の植物の蒐集につとめ、更にまた鉱物の蒐集につとめた。求めるものを探して、滞在している丘陵地帯を「遠くまで方々歩きまわり、何日も帰らないことがあった。」<sup>16)</sup>そこは自然の真只中で、短期間田舎の生活を楽しむだけの都会の人々はこのような所を知らないであろう、とある。<sup>16)</sup>

夏が終ると家族のもとに帰り、冬の間、翌年の夏に遠くまで歩けるよう準備した。そしてその夏は高山に登り山の中を歩きまわった。そのとき鹿を見たのがきっかけで動物の観察も始める。その翌年の夏には山案内を頼み氷河を観察した。それからも毎年夏になると山に出かけた。冬が過ぎ、日ざしが強くなり、雪が消え、庭の木々の芽がふくらむと、「私はもう野外へと駆りたてられるのであった。」<sup>17)</sup>

そうしたある日、ハインリヒは、「ふと形態を描いてみようと思いついた。自然の対象物を言葉で記述するように、模写することもできるわけで、この方が、結局はもっと良いのかも知れないと考えたのである。」<sup>18)</sup>

絵を描くことによって、観察がますます詳しくなった。高山の頂上から景色を眺めるとき、これまでとはただ眺めて楽しく思っていただけであったが、観

察眼が鋭くなるにつれて、「地表の形態の特徴がだんだんはつきり捉えられるようになり、大きくまとめて全体を展望できるようになって来た。」<sup>19)</sup>

ハインリヒは、山嶽地帯の地表の形態に関して、前に読んで忘れていた比喩を思い出す。「以前に書物で読んでその後忘れていた昔の比喩のことを思い出した。大気中の水蒸気から拡大鏡でもほとんど見えない程微小な水滴が窓ガラスに付着して、適当な寒気が加わると、細い線や星や扇や棕櫚や花などの模様の膜ができて、氷の花と呼ばれている。これらすべてのものは、一つの全体的な図形を構成しているが、この氷の放射線や谷や根根や結節の形態を拡大鏡で見ると、すばらしい光景となる。非常に高い山から眺めた下界の地形はこれとちょうど同じように見えるのである。地表は素材が凝固して生成したものに違いない。そして扇や棕櫚のような形態を壮大な規模で展開しているのだ。」<sup>20)</sup>

窓ガラスの氷の花と山嶽地帯の地表の形態。この微小なものと大きなものとを、同じものとして見るこの態度は、直ちにシュティフターのあの『石さまさま』の「序文」へと我々を導く。「序文」に云う、「まずしい鍋の中の牛乳を沸きたたせてこぼす力が、火を吐く山にこもるラヴァを押し出して山の斜面に流す力となるのである。」<sup>21)</sup>と。

### III

『晩夏』は1857年出版されたのであるが、執筆が始められたのは1853年であった。その前年の1852年秋、シュティフターは『石さまさま』のあの有名な「序文」を書いている。前述の如くハインリヒは、窓ガラスの氷の花と山嶽地帯の地表の形態とについて、「以前に書物で読んでその後忘れていた昔の比喩のことを思い出した」と云っているが、この言葉は、『石さまさま』の「序文」を指示するに等しい。そもそも長編小説『晩夏』は、長編小説のかたちとなる以前、短編小説の『鳥好きの老人』という題名で『石さまさま』に収められるはずであった。この点から見ても、『晩夏』の中に『石さまさま』の「序文」との関連性が見られるのも故なしとしないと云えるであろう。

シュティフターは、その「序文」で偉大なものと小さいものについての見解を述べることによって、一つの自然界を造り上げた。シュティフターの造り上げた自然界においては、おだやかなものが激しい

もの荒々しいものよりも偉大であるとみなされる。「風の吹くこと、水のながれ、穀物の生長、海の波たち、春の大地の芽ばえ、空の光、星のかがやき、これらを私は偉大だと考える。壮麗におしよせてくる雷雨、家々をひき裂く電光、大波を打ちあげる嵐、火を吐く山、国々を埋める地震などを、私は前にあげた現象より偉大であるとは思わない。いや、むしろ、小さいものと考え。なぜなら、それらも、はるかに高い諸法則のはたらきによって生れたものにすぎないからである。それらは特殊の場所でのみおこり、一面的な原因からの結果なのである。まずしい鍋のなかの牛乳を沸きたたせてこぼす力が、火を吐く山にこもるラヴァを押し出して山の斜面に流す力ともなるのである。ただ後者の現象が一そう目だつので、わけを知らぬ不注意な人たちの目を、より多くひきつけるのである。しかるに、研究者の精神態度は主として全体的・普遍的なものに向い、ただそこにだけ偉大さを認めることができるのである。なぜなら、それだけが世界をささえるものであるからである。特殊の現象はすぎざって行く。そのはたらきはしばらくすればほとんど認められなくなってしまふのである。」<sup>22)</sup>

一つ一つの、一見小さいと思われる自然現象を通して、全体的・普遍的に働く法則に至る実例を、シュティフターはこの「序文」の中で述べているが、同じような事例が、『晩夏』の中においても、上述の山嶽地帯の地表の形態の研究に関する個所で、全く類似の表現で述べられている。

(序文) 「ある人が多年にわたって、つねに北をさしている磁石の針を、毎日一定の時刻に観察して、針が北をさす精度の変化を記録するとする。この仕事をみて、無考なものは、きっと小さい、児戯に類したことと思うであろう。しかし、われわれがつぎのことを知ったとき、この小さい仕事、この児戯は、どんなにか畏敬と感激のもととなるであろう。すなわち、この種の観察は、じつは地表の全面において行われているのであって、それを整理してつくられた図表によって、磁針におけるさまさまな小さい変化はしばしば地球のあらゆる地点において、同時、かつ同程度に、あらわれ、したがって、ある磁気嵐が地球全体をおそい、地表全体がいわば一種の磁気の戦慄を感ずるということが、

あきらかにされるのである。(略) 科学というものはただ一粒一粒を根気よくあつめるものであり、観察をつみかさね、個々のものから普遍を構成するのである。」<sup>23)</sup>

ここに述べられた「一粒一粒を根気よく集め、観察をつみかさね、個々のものから普遍を構成する」という自然研究の方法を、ハインリヒも行って次に述べるように「さまざまな個所で細かな事実を集めて、それを全体へと拡大」して行こうとするのである。

(晩夏) 「足下に展開する地表の観察には、これまで長い時間を費やして来たが、今や私の心はより高い感動へと高められた。もし、この地表の成立の跡をたどって行き、さまざまな個所で細かな事実を集めて、これを今眼前に展開する雄大な全体へと拡大し、地球上の高山を次々と踏破して、ついにはそのすべてを尽して、広大な海以外には地表上に調査するところがなくなるとしたら、これこそやりがいのある仕事であって、これまで私がやって来た仕事は単なる準備作業にすぎないものではないかと思われるのであった。

このような感情と観察に刺激されて、今までやってきたすべての仕事のいわば要石として、あるいは、総括として、地表形成の学問を、そしてそれを通してもしかするとできるかも知れない地球自体の形成の学問を進め始めた。」<sup>24)</sup>

長々と引用したこれらの記述に見られる類似性から、『晩夏』と『石さまざま』の「序文」との深い関わりを知ることができる。ハインリヒの自然研究の背景には、『石さまざま』の「序文」がある。自然を研究するに当たり、一つ一つの小さい現象の中に全体的・普遍的にはたらくものを見、そこに偉大さを認めるという態度をとることによって、ハインリヒは、シュティフターが『石さまざま』の「序文」によって造り上げた自然の秩序の中に移り住むのである。

#### IV

結び。

Iにおいて見てきた、子供の発育のために良い場所としての自然は、「穀物の生長や春の大地の芽ばえ」の場であるはずであって、「火を吐く山や国々を

埋める地震」という現象の場ではない。『石さまざま』の「序文」によれば、生長や芽ばえということは、ごく普通のありふれた現象であるが、そこにこそ働いている普遍的・全体的な法則の故に、一見偉大に見える火山や地震という一面的な原因からの特殊な現象よりも偉大である、とみなされる。そう考えるならば、子供の発育のために良い場所としての自然は、偉大な現象の場である。

ところで、これまでに見て来た自然は、「序文」にいわゆる「外的な自然」であるが、もう一つの自然、即ちシュティフターが「序文」の中で、外的な自然と事情が全く同じであると云っている「内的な自然」についても見ておかなければならない。

IIで見た如く、ハインリヒは毎夏山歩きをして山嶽地帯の地表の形態を観察研究するようになって以来、冬が過ぎ、日ざしが強まり雪が消え庭の木々の芽がふくらむと、「私はもう野外へと駆りたてられるのであった。」<sup>17)</sup> (So mahnte es mich bereits in das Freie.) この衝動(Drang)をさしあたって少しでも満足させるために彼は野外に出かけるのであるが、ここに非人称主語 es が用いられており、その現象が衝動と名づけられていることから、これをハインリヒの「内的な自然」の現象と見てもよいであろう。春を告げる外的な自然にハインリヒの内的な自然が呼応していると云えよう。

ハインリヒのこの内的な自然は、彼を駆って、激しい荒々しいものへではなく、自然の研究へと向かわせる。ハインリヒが勤勉であることや、研究に打ちこんでいることは既に見て来たが、これは彼が「序文」に云うところの「人類のみちびきとなるおだやかな法則」によって導かれていることの表われである。

ハインリヒの幼年時代から、彼が自然研究に従事するに至るまでの間、そこに見られる自然には、その外的と内的とを問わず、激しいもの荒々しいものは存在しないかの如くである。

#### テキストと参考文献

Eben, K. und Müller, F.: Adalbert Stifter Sämtliche Werke VI, Gerstenberg Hildesheim, 1972. 以下 SW VI と略記する。

藤村 宏: シュティフター晩夏, 集英社, 東京, 1986. 引用した訳文はこの書による。但し必要に依

じて部分的に逐語訳とさせて頂いた。

手塚富雄：水晶，岩波書店，東京，1988.

Roedl, U. : Adalbert Stifter, Rowohlt, Reinbek bei Hamburg, 1982.

Obermaier, R. : Stadt und Natur, Peter Lang, Frankfurt am Main, 1985.

注

1) SW VI 1.

2) 同 5.

3) 同 5.

4) 同 8.

5) 同 8.

6) 同 14.

7) 同 15f.

8) 同 49.

9) 同 10.

10) 同 17.

11) 同 18.

12) 同 22.

13) 同 22.

14) 同 23.

15) 同 26.

16) 同 28f.

17) 同 36.

18) 同 37.

19) 同 39.

20) 同 39f.

21) 水晶 85.

22) 同 84f.

23) 同 86f.

24) SW VI 40.

(受理 平成元年1月25日)